

ハイデルベルク信仰問答講解説教2「神の言葉があなたを変える」(2011年8月14日 礼拝説教)

【聖書箇所】

開け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。(申命記6:4-5)

「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。(ローマ7:22-8:2)

【説教】

先週より、ハイデルベルク信仰問答による説教を始めました。問1ではこの信仰問答全体を貫く信仰、わたしたちの信仰を突き詰めて言えばこういうことだという、すべての結論とも言うべき宣言がそこにありました。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。わたしがわたし自身のものではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです。」このわたしの人生のすべて、生きるにも死ぬにも、そのすべてがキリストのものだとされた。それはキリストのご支配のもとにあるということです。わたしたちの人生に起こってくる様々な問題、忘れてしまいたい過去、取り消すことができない失敗、そのすべてをキリストがあがない御自身のものとしてくださる。そこにわたしたちの本当の慰めがあるとこの信仰問答は述べています。人生の答えはここにある。そこに向かって聖書は語り、またそこに向かってこの説教も語られている。そういう明確な目標があるのです。先週の説教では、この説教はいささか手間がかかるということを示しました。準備にも時間がかかると。しかし準備をしながら体験的に言えることは、語るべきこと、説教の目標がはっきりしている分、大きく外れることがない。安心して説教を組み立てることができるのです。それはまさしく教理によって聖書の示す福音の筋道をはっきりしているからなのです。

例えば、今日のところでは、人間の惨めさが語られます。慰めを語って、惨めさを語る。ここに大きな落差を感じる人も少なくないと思います。いきなり突き落とされたような印象を受ける。しかしただ惨めさを語って終わりではない。ただ裁きではないのです。この惨めな人間のために神さまが何をしてくださったのか。イエス・キリストを与え、この惨めな人間の罪を全部あがなってくださったのではないか。この人間を御自身のものとしてくださったのではないか。だから惨めなままで終わらない。希望を持ってもう一度新しく歩みだす道がここに開かれていることを知るのです。

早速、第二主日のところをもとに御言葉に聞いてまいりましょう。ここからハイデルベルク信仰問答は本論に入ります。それはまず人間の惨めさから始まります。これは先週扱った第一主日の問答、問2のところ、この慰めに生きるためには、三つのことを知る必要があると述べております。救いに必要な三つの知恵です。すなわち、第一に、わたしたち人間の罪と悲惨がどれほど大きいのか。第二に、どうすればこの罪と悲惨から救われるか。第三に、この救いに対して神さまにどう感謝すべきか、ということです。今日のところはその第一の部分、人間の罪と悲惨についてです。

明日八月一五日は、六十六年目の敗戦の日となります。この八月は特に戦争を記憶する時として特別な思いをもって過ごしています。人類において普遍的な問題の一つに「なぜ人は争う

のか」というのがあります。人類の歴史はある意味、戦争と切り離すことはできません。戦争の上に、その犠牲の上に歴史が作られてきた。そういう言い方もよくなされます。またよくキリスト教への批判の中でキリスト教はよく戦争をするというのがあります。中世の十字軍の闘いや近代のプロテスタントとカトリックとの争い。また現代においては、特に9.11以後、キリスト教とイスラム教の対立もあげられます。戦争と宗教の問題はこれもまた根深いものがあります。これだけでも膨大な研究がなされているでしょう。せつかく信仰をもって、戦争をしては意味がないのではないか。だから宗教は怖い。それが宗教に対する嫌悪感となって表れるということがあります。しかし、それは宗教の問題でしょうか。キリスト教だから、イスラム教だから戦争するというではありません。その信仰に生きる人間が信仰を間違えているからです。それは信仰の問題ではなく、極めて人間の問題なのです。

京都大学の霊長類研究所はその研究では権威のあるところだと思いますが、そこのある学者が、「人間の悪はどこから来たのか。それを知るためにサルまでさかのぼって研究しようと思った」と言われました。でもサルを研究すれば、人間の悪の問題は分かるのでしょうか。サルの行動様式を学ぶことで戦争の問題が明らかになるのでしょうか。「人はなぜ争うのか」その答えが本当にサル山にあるのでしょうか。確かに、サル山では今日もサル同士がけんかしているのを見ることができましょう。えさの奪い合いをしている。一匹のメスを巡って、オス同士がけんかする。そういう単純なサルの世界を、そのまま人間の世界にあてはめてよいのでしょうか。人間とサルは違うのです。もっと人間は複雑でありますし、人間の抱えている闇はもっと深いところにあります。

その闇を明らかにするのは人間ではありません。この人間をお造りになられた神さまがこれを明らかにされる。人間の抱えている問題、その根の部分に神さまはご存知なのであります。問3「何によって、あなたは自分の悲惨さに気づきますか。神の律法によってです。」律法、それは神さまの言葉です。ですから言い換えれば、神さまの言葉によって、わたしたちは初めて自分の抱えている闇、悲惨さに気付くということです。

しかし、わたしたちは、なかなか自分の過ちや惨めさを自分で認めようとはしません。むしろそういう都合の悪い部分には蓋をしてしまおう。蓋をして表に出さない。まるで他人事のようにしてしまうことがある。また人の過ちには敏感に反応するけれども、いざ自分のこととなると非常に鈍感なのです。自分では自分の悪いところになかなか気付かないのです。でも自分以外の外なる存在によって、指摘されて、初めて自分の間違いに気付くということがある。しかしそれでも、その間違いを素直に認めることができない。指摘されれば指摘される程、頑にな

り、かえって開き直ったり、自分は棚に上げておいて、人を悪く言うことで、自分の正当性を主張したりするものです。ですから人間が自分で、あるいは人間同士で過ちを指摘するのは難しい。先日も長老会で人を指導する、間違いを正すことは非常に難しいという話題になりました。でもそれが長老の務めです。長老はただ人間的にそれを指導するのではなく、御言葉によって、その人をただすことができる。それを教会と言います。牧師とともに群れを牧するのです。

今、「ただす」という言葉を用いました。それは正しくするという意味です。誤りを正す。もう少し強い言葉では、罪の有無を調べる意味で、糾弾の「糾」の字を使うこともあります。いずれにしても人間が人間を本当にただすことができるのかということを考えます。人間が人間を正しい道に導くことができるのか。そこは大いに考えなくてはならない。人間を本当に正すことができるのは果たして人間だろうか。神さましかいないのではないか。本当に正しいお方でなければ人間を正すことはできないのです。それは罪のないお方でなければならぬ。

だからこそ、人間には神さまの御言葉が必要なのではないのでしょうか。神さまの言葉だけが、わたしたちの悲惨さを明らかにするのです。ルターは「外なる言葉」と言いました。人間の内なる言葉には人間を正したり、気付かせたりする力はないのです。ただ外なる言葉だけが、わたしたちを誤りに気付かせ、正すことができる。この外なる言葉、神さまの御言葉がなければ、人間は間違った方向に進んでいても、まったく改めることもできず、気がついた時はもう遅いということになってしまうのであります。

教団信仰告白では、聖書を「信仰と生活との誤りなき規範なり」と告白します。この規範としての聖書ということがここでも重要になるでしょう。間違いがわかるのは、間違っていないことが示されて初めて分かるのです。交通違反が分かるのは、交通法があるからです。その基準、規範となるものがあって、初めて間違いが分かる。そういうすべての規範こそが聖書、神さまの御言葉なのです。人間はそこでしか自分を正しく見つめることはできません。

では、その神さまの言葉である聖書は何をわたしたちに求めているか。問4、ここでは福音書にある主イエスの教えがそのまま記されています。律法の要約として主イエスが教えられたものです。神さまを愛すること、隣人を愛すること。神さまの言葉はこの二つに要約される。この愛に生きているか。そう問われている。そこではかるのです。そして驚くべきは問5です。わたしたちはこの愛に生きることができないとはっきり述べているのです。それどころか、「神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いている」と言うのです。それは少し言い過ぎではないか。いくらなんでもそんなに人間は悪くない。憎むことなんかない。でもそうでしょうか。

「完全に」というのは、一点の曇りもない、心の底から愛するということです。そのように神さまを愛してきたか。隣人を愛してきたか。神さまを愛するということは、その御言葉を喜んで聞き、従うことです。礼拝することです。でもどうでしょうか。もちろん外面的にはするのです。教会に来て、礼拝し、奉仕もする。でも心からというのは難しい。また隣人を愛することもそうでしょう。家族でも、教会の交わりでも、心からというのは難しい。表面的には仲良くすることはできます。でも心から愛し合い、赦し合うことができるか。心のどこかでいがみ合うのです。それは今日の御言葉でパウロが自分のことをそのように自分の中で分裂があることを述べています（22-23節）。

それは、ちょうどボールが坂道を転げ落ちるように留まるどころを知りません。そのままにしていればそうやって落ちて行くだけです。それは惨めです。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」このパウロの叫びがよく分かります。

ハイデルベルク信仰問答は、そういう人間の本性を見抜いて

います。だから「できません」と答えるのです。つまり表面的なことでお茶を濁すようなことはしない。初めから「できない」のです。まずはそこに立つこと。そこに立たなければわたしたちの新しい関係は始まらない。いつまでもいい顔をして表面的なおつきあいをしていても問題は解決しないのです。まずは如何にわたしたちが惨めなのか。疑い深く、嫉妬深く、愛に破れているか。それは皆さんお一人お一人が経験的によく分かっておられるでしょう。自分のことですから。

しかし、この惨めな人間を神さまはお救いになられるのです。神さまはこの惨めなわたしたちに絶望されないのです。イエス・キリストを与えて、わたしたちが愛に生きることができるようになってくださった。だからパウロはここで突然「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と述べるのです。惨めさを語りつつも感謝せずにはおれない。この主イエスが「罪と死との法則からあなたを解放した」からです。罪と死に向かって坂道を転がり落ちる人生は、イエス・キリストによって一転するのです。

ヨハネ福音書は、「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」（1：14）と語ります。神さまの言葉は、わたしたちはその罪の悲惨さを気付かせるだけではありません。その神さまの言葉がわたしたちを新しくする。イエス・キリストという生きる神さまの御言葉によって、人間はもう一度神の子として創造されるのです。この外なる神さまの言葉がわたしたちを惨めなままで終わらせない。新しく祝福された人生へと導かれることを感謝しましょう。祈ります。

天の父。あなたの御言葉によって、自分がいかに罪の中に落ち込んでいたか分かります。でも同時に、その生ける命の御言葉によって、わたしたちがその罪の闇から引き上げられ、祝福された新しい人生に歩むことができる恵みを覚えます。どうぞ一人でも多くの者が、このキリストという命の御言葉に出会い、愛に生きる者とされますように。主の御名によって祈ります。アーメン。